

ればなりません。

仕事へ行くにしても、これは一種の売物、高売で、二つらが下手ばかりに出ていては口う存ことにはならん。

セクターから仕事へ行くの。も、周囲の路上手配で仕事へ行くのも、露店の高いと大した違いはない。売るものがぼんの少し違うだけだ。

売って 食って・チョン

労働力を売るか、あるいは品物を売るかして金の手に入れたら、それは食ってやるんだ。

血を売ってラーメン食って一服酒飲んみノ千七百円、というのには皆さんの短歌だか俳句だかよくわからぬ作品だが、何やら誠にこもつともという感じがする。

あばら「んら自分で作って売りにきてるんやろ、無理ややってるんやろ、ワシには判らんや、ときめかてふくれて見せたオバチャン達がやってるさかえ食堂前の果物、野菜の店その前光りウスの様でやってる魚屋、お所

にある市ルモン屋、そして、雨天からセクターの完成後二階に入りたがら、いまだに屋台の露店が濃厚な食卓。金うぼうも結構露天でまにあう。釜ヶ崎日雇労働組のやつている炊きだしも露天だ。

又女ん達は自炊もする。

金を得るのも露天、金うのも、日用品を売るのも、雨としては売るのも露天。そして、死を運ぶのも……。

ああやらかもと、われらがせいかつただただ、ヘソの緒を切ったが屋内というのが悩まされる。

★ ★ ★

「ごてんは最初、露店であつたが、そう少くももたせようとしてん」とした。しかし、フロシキも払ただけで、見直したんぞにはとてもごやういがない。露店であつたが、りやをやった経験からいへば、雨の日こそ張り切つて店を出すことに素気のようなものを感じていた。と同時にドリヤれなことも……うてん」はそう一度挑戦したい(ハヤ)

玉姫公園の朝市はどんなだった？

―山谷への手紙またはひとりごと―

久しぶりで手紙を書く。

しかし、ぼんとは、いまきみが何処にどうしているか、おれは知らない。だからこの手紙は郵便としてはポストに入られない手紙なのだ。別のいい方をすれば、何処にどうしているか知らないきみを思い浮かべながらする、おれのひとりごと、というわけだ。

なぜ急に、きみに向けたりひとりごとをいう気になったのかを、まず説明しておこう。

おれはいま釜ヶ崎でこの雑誌「労働者渡世」、通称は略して「渡世」をつくっているメンバーの一人なんだが、とんど「渡世」の編集プランに「露店」というテーマがきまつた。

それでおれも何か記事を書かねばならない。

釜ヶ崎はミナミからたつて、三角公園・釜生協周辺、警察うら公園周辺、萩之茶屋小学校東側といった具合に露店がたぐさん出ていて、ほかに銀座通りにも点々とあ

るし、カスミ町の踏切近くとか、今池駅から萩之茶屋駅へ行くあいだの商店街の二つの四つ角付近(早朝だけ)とか、実にたぐさんの露店がある。

だが、これはまあ「渡世」の他の編集委員で十分にレポートできるわけでおれが手や口を出すことはない。

で、考えているうちに、山谷の露店はどんななってるんだろうと思いついて、それがこの手紙――まぼろしのきみを相手にしたひとりごとを書こうと決心させた。そういうわけだ。

玉姫で買った品物

山谷の露店といえどもちろん玉姫公園。

あの朝市の風景がまず浮んでくるけれど、いまはどうなっているのかなあ。

きみやおれが、あの朝市をよくうろついたところは、なかなか立派な品物から売っているオッサンにも正体のわ

からないガラクタまで、雑多も雑多、実にいろんなものが地べたのゴザの上に並んで、いや山積みされて、ひやかすのがたのしかった。

もう二十年近くムカシの話をしてゐることで、ちょっと寂しくもなってくるけどまあ仕方がない。

そこで思い出すんだが、山谷の朝市で買った品物のうち二つを、おれは釜ヶ崎まで持ってきたのだった。

その一つは、百円也で買ったボンチョ。というのか、昔ふりにいえばチョッキで、うしろ半分はおとなしいグレイの無地だけど前の方は一センチ角ぐらいの朱色の市松格子というヘデなしのもの。左わきにフラスナーのついでるやつだった。

ゴザの上にあつたそいつが妙に気に入って、当時の百円という値を負けろといわずに買ったあと、大分長く持っていて、つまりヘデなのを喜んで着ていて（おれだってモチロン若かったけどサ）、釜ヶ崎へ流れてくるときにちっちゃな荷物の中にもそれを入れてきて、こっちでも何度かセンタクに出してはよく着たものだ。

マルナカ因縁

だんだん思い出がつかなくなってくるけど、そのヘデなボ

ンチョをほめてくれた人間が釜に二人いた。

一人は、ある時期おれといろいろ複雑なワケありになった小料理の娘で、そのコは自分がヘデ好きのせいかな、ずいぶん気に入ってるよりだった。

次の一人はマルナカという古着やのオヤジで、この古着やとはなぜか釜で一番さき親しい口をきいていて、オヤジともカアチャンとも遠慮のない仲だった。あるときこつちがすっかりシケコンデ、物でも売る以外シノギがつかなくなつてあれこれ持ちこんだとき、季節はずれのそのボンチョをえらく賞めてくれた。「あんたセンスええのやなあ」とかいって。

さて、ついでにそのマルナカの話をつづけると、マルナカは一時、古着やの店をしめて別の場所ですちのみ屋をやったことがあつて、むろんおれはそっちも常連になつてツケもきかせたんだが、その場所がたんと、複雑なワケありの娘がいる小料理屋のとなりなんだ。

あのときはまあいろいろ、便利でもあれば照れくさく気づまりでもあつたものサ。

いまはどっちの店もない。

小料理屋の方はほんとに跡形もなく、ワケありの娘ともとりに切れた。しかし因縁はまだマルナカとはつながっていて、立ちのみ屋の店をやめたマルナカは、前の古

着やの方で手荷物預り所と新聞週刊誌の売店をやり出し

て、オヤジ、カアチャン、それにまだちいさな一人娘は住いを釜の外へ移したけれど、店の方はずっと番頭を置いてやっている。そして、その手荷物預り所兼新聞週刊

誌売店（ほかに赤電話二台と清涼飲料と古着も少々）がいまおれたちの作っている「渡世」も売ってくれているのだ。オヤジとは長いこと合わないけど、番頭も気持ちのいいタイショウで、この店だけで「渡世」は毎号百五十冊ぐらい売れてるよ。

しかし、おれは何の話をしたんだっけ——？

そりだ、山谷の書店で買った品物を二つ、釜まで持ってきた話から、だんだんおかしくなつたんだな。とかく年をとると思ひ出に流れるんだな。ヨクナイ傾向だ。

ところでもう一つの品は何かというところ、これはいまでも使つてゐるツメ切りで、二十円だったか十円だったか、とにかく気まぐれに買ったようなものが、不思議にずうつと残っていて切れ味も落ちない。

「渡世」は山谷にまゐる

さて、きみに聞きたいこと。

去年、実はちよつとおれは山谷へ行つた。

なにしろわが「渡世」は山谷でも販売してゐるからね。

別に集金とかアイサツとかじゃなくて、どんな具合に売られているか、ほかの用事で東京へ行つたついでにのぞいてみたんだ。

おぼえてゐるだろ、清川の長瀬書店。

そりさ、あの競馬の並びのホンヤよ。

忘れるわけがないよ。同じ並びのムニヤムニヤつてエ店に、きみもおれも働いていたんだから。

ウン、そのムニヤムニヤつてエ店は、昔とすっかりおなじように販売していた。おれは寄つて飲んだんだからまちがいない。

デブのおかみはさすがに「まあ——さん」とかいってすぐおれがわかつたな。

それから、きみやおれがいた時分カンバン娘だった国子の妹なんか女が四、五人。うすつくらくて、ションベン臭くて、レコードがじゃんじゃん鳴つて、やつぱり昔のまんまの哀愁列車よ。

しかしどうも話がまとまらないよね。

昔の話はやめとこ。

去年という、まだ新しい話をしよう。

「渡世」はまあ、山谷でもボチボチ売れてるようだった。それを納得してからおれは一泊九百円の紅陽へ部屋

